

華洛非人桑門之悟

一 光源氏物語本事

更級日記云菅孝標ひる源氏の物々をりみ十世帖よ
瑞くしてこそ有

・虚云この世十世帖、平の帖教せりらの人梅人さうの
と下 ひとりとうりり 此りとの居なるといふ
春にかりうへくち十帖してしてしとふ平をい天名
のあ天とぶのしつるよやううー世春々ことあが
しとくともいやー奇もる倫わー奇乳母を
のーわさともしはる人ゆるめにくらがーたはるるとの

光源氏物語本事 巻頭 (松平文庫蔵)

目次

研究篇

伊勢物語ものがたり根本こんほん本

— その虚構と方法 —

片桐 洋一……………三

「交野の少将」と「うつほの俊蔭」

野口 元大……………三

源氏物語の方法に関する断章

— 「若菜」巻における明石物語・統 —

秋山 虔……………三

源氏物語の主題形成の方法

— 第二部を中心に —

森 一郎……………一〇一

玉鬘物語論

吉岡 曠……………一三

源氏物語の準拠と構想

山中 裕……………一七

源氏物語に潜む仏教思想

岩瀬 法雲……………三三

目次

紫式部日記管見……………石川 徹……………二五

——「思ひかけたりし心」をめぐって——

資料篇

天理大学図書館蔵

幻 中 類 林……………今井 源衛……………二六

(付) 松平文庫蔵 光源氏物語本事

実践女子大学図書館蔵

むらさき式部集……………三谷 邦明……………三二

研 究 篇

一、実相を仮相において表わす

津の国芦屋の里に住む公光は、若年の頃から伊勢物語を賞翫愛読していたが、ある夜、靈夢を得て、京洛紫野の雲林院に脚をいそがせた。伊勢物語の根本を悟らんがためである。

ようやく雲林院に到つて、花の下に詠め休らい、さては花を手折らんとすれば、花守であろうか、一人の老人が現れて、それを咎める。互いに問答を交わし、公光は我が名とともに此処に到つた趣旨を白す。老人は感じ入つて、この雲林院こそは、昔、二条の後の山荘であつた。汝がこの庭の花の下に伏して時を待てば、二条の后が現れて、伊勢物語の根本深義を授けてくれるであろうと告げ、わが名をも名告らずに去つてゆく。公光は、言われたままに花の下にて眠りにつくると、はたしてその言葉のごとく、夢の中に、紫の薄衣に紅の袴を著したなまめかしき女人が忽然と現出し、我こそは二条の后なりと名のつて、伊勢物語の品々、特に、みずからが「武蔵野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり」と詠んだ武蔵野は、まことの武蔵野にあらで春日野の内なる武蔵塚のこと……と秘義を語り明かし始めた時、黒頭の怪士立ち現れ、我こそは二条の後の兄、藤原基経が魄靈である。二条の后が「武蔵野は今日はな焼きそ」の歌をよんだ時、立ち現れて后を取り返したこの基経が、その時の「鬼一口」の光景を再現して見せようとして汝が夢中に悪鬼の姿にて現出したのだと言う。女の方もこれに賛同して、まさしく今は「白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを」と業平がよんだあの夜を思い出させる夜半の暁である。「海人の刈る藻に住む虫のわれからとねをこそ泣かめ世をはうらみじ」とよんだ私も、あの夜を再現させることに協力しようと述べ、ここに基経、二条の后ともどもに、業平に奪われながら結局はとりかえした時のことを語り証かす。

とらわれまいとて、武蔵野さして逃げゆきて、武蔵塚の内に隠れ入つた后を、基経は追いかけて捕えようとしたが、夜は闇、暗さは暗し、「いかがせん、松明とばし漁りゆけば、一つの塚あり。塚の奥に入りて見れば、后はここにましまし